

# 2009 年アライグマ対策技術集（暫定版）

執筆  
作成

川道美枝子 金田正人 加藤卓也 川道武男  
関西野生生物研究所



1997年5月 京都府綾部市 隠龍寺

## 1) 原産地のアライグマの生態

川道武男（関西野生生物研究所）

アライグマは北米大陸に広く分布する普通種である。人家近くにも出没し、食物を洗うようなしぐさや可愛らしい姿など、なじみ深く人気がある。しかし、性質は荒っぽく、狂犬病などの病気の媒介者とするため、原産地でペットとして飼育する人は多くない。

アライグマは、哺乳類食肉目のアライグマ科 Procyonidae に属する中型の動物である。アライグマ科には7属19種が含まれる。アライグマ属 Procyon に属するのは7種で、その1種がアライグマ Procyon lotor である。左写真上は原産地カナダのアライグマ。下は京都市のアライグマ。



### 分布

米国のほとんどの地域と、カナダ南部、南米北部に生息する。近年、分布が拡大しており、温帯、熱帯、亜寒帯まで、生息環境は幅広い。生息する環境のタイプは非常に広く、森林を含むさまざまな場所でみられる。人間の住環境にも出没し、農作物を食べる。一般



に水のある環境に近づける場所を好む。巣は通常、樹上にあるが、ウッドチャックの巣穴や、ほら穴、鉱山、廃屋、納屋、ガレージ、排水溝、人の住む屋根裏も巣にする。

### 形態

北米で記録される体のサイズは、体重 1.8~10.4 kg（平均 6 kg）、体長 603~950 mm で、そのうち尾長は 192~405 mm で、体長の 42~52 % である。オスはメスより 10~30 % 重い。体色は、地域により異なり、灰色から赤褐色、淡黄色までである。前足は接触感覚が鋭く、また指の動きが器用なので、食物を前足で触り、両手ではさんで食べることもできる。

### 繁殖

年に1回繁殖するのが普通である。交尾期は2月~6月末で、最盛期は3月。北方の個体群は南方の個体群より早くに繁殖を開始する。交尾期に、オスは頻繁に行動圏を拡大する。おそらく交尾可能なメスの行動圏を含めるためであろう。交尾期にメスとオスは一時的に同居する。交尾後は雌雄が協同しない。交尾は一妻多夫的、乱婚的である。

妊娠期間は63~65日。産子数は3~7仔（平均4仔）で、出生時の体重は平均80gで、樹洞で産まれた子供は閉眼で、生後18~24日で開眼する。離乳は平均70日後、子供の独立は平均で生後10ヵ月。20週までは、子供は母親と一緒に夜間に採食し、母親と同居する。子供は、出生年の冬は母親の巣かその近くに留まり、翌春は早くから独立するようになる。

メスの性成熟は生後8~12ヵ月で、しばしば1歳になる前に性成熟する。オスの性成熟は平均24ヵ月である。性成熟しても、母親の巣の近くに留まることがしばしばある。

## 寿命

最長寿命の記録は、野生で 16 年、飼育下で 21 年。平均寿命は野生で 5 年。野生では大部分が出生年の次の年をまっとうできない。主要な死因は人為的（狩猟、ワナ、交通事故）および栄養不良。

## 行動

主に夜行性。非常に寒い時期には、長期間にわたり眠るが、冬眠はしない。その期間中、代謝率と体温は安定していて、体脂肪を消費して、体重の半分になるまでの潜在能力がある。基本的に単独性で、唯一の社会単位は母子である。ときには、1 頭のオスが繁殖前の 1 ヶ月間、メスとともに留まり、出産後も留まる。地上では時速 24 km の速度もだす。木登りの能力はすばらしく、遊泳能力もある。定住個体は、1 夜に 0.75~2.5 km 移動する。オスは秋から春の期間に遠出するが、メスは夏に遠出し、母親は子供とともに採食する。

生息密度は、生息地のタイプによって大きく変わる。湿地や潮間帯や遊水池などの湿った低地帯では、1 平方キロに平均 50 頭になる。農業地帯と落葉広葉樹林帯では 1 平方キロに最大 20 頭にまでなり、郊外地では最大 69 頭に達する。最高密度の記録は、ミズーリ州の湿地帯で、1 平方キロに 400 頭であった。

## 行動圏

行動圏の直径は、1~3 km であるが、最大 10 km になる。行動圏面積は、さまざまで、0.2~4946 ha までであるが、典型的にはオスが 65 ha、メスが 39 ha くらいである。行動圏は排他的に配置されていない。しかし、いくらかの縄張り制が報告されている西部プレーリーでは、食物資源量を反映して生息密度が低い（0.5~3 頭/平方 km）。

## 食性

雑食性であり、食物であればこだわらずに食べる便宜主義者である。植物が動物よりも割合が高い生息地もある。植物質の食物はさまざまで、果実から堅果までである。手に入るなら、ナシ、プラム、イチジク、スイカを食べる。ある地域ではトウモロコシが最も重要な食物である。動物質では、脊椎動物より無脊椎動物を食べる。ザリガニ、昆虫、齧歯類、カエル、魚、鳥卵などである。郊外や都市では、生ゴミなどを食べる。道路上の交通事故死の動物死体を食べることもある。アライグマは巣から食物が豊富な場所へ直線的に移動する。

## 外来生物として

外来種としてアジアとヨーロッパに定着している。ドイツ、ロシア、ベラルーシに導入されたアライグマはポーランドなどに拡大している。ドイツのアライグマを研究したルッツ（1995）によれば、ドイツに 1934 年に導入され、ドイツ全域に広がり、その後に周辺国へ分布を拡大している。導入して 60 年になるが、形態とサイズは北米のアライグマとほとんど変わりが無い。ドイツでの生息環境は低山地で、カシヤブナの森林や湖や河川を含む。アライグマ個体群の拡大には、3 つの相が見られた。導入されたアライグマを見つけるのが難しい初期の相、次の相は 1960 年以來で、導入地域で個体群が急激に増加し、1975 年頃

には頭打ちの状態になった。第3相では、低いレベルで個体群が安定した。

コーネマンら（2008）は、ドイツ北西部にあるミューリッツ国立公園でアライグマを調査した。この地域は広大な湿地帯が広がる。ドイツの森林帯のアライグマに比べて、生息密度が高く、行動圏は小さかったため、本種にとって快適な生息環境と考えられる。

ドイツ国境に近いポーランド西部の湿地帯で、発信器を装着させて研究したバルトスチエウィツら（2008）によれば、-10 になる厳冬期では積雪が5cm以下にもかかわらず、最長1.5ヵ月も隠れ場所から離れなかった。食物は、バイオマス量で齧歯類が34%、イノシシとシカ科動物の死肉が10%であった。他に鳥類、両生類、魚類、昆虫の順であった。アライグマは様々な生息環境に適応し、行動圏のあり方と巣場所選択には高度の柔軟性がある。高密度に達している幾つかの地域では、アライグマによる捕食圧を高め、危険な寄生虫や病原菌の伝播・感染を高めるだろう。

#### 疾病・病原菌

狂犬病の感染率が低い個体群では、生息密度が2倍であるから、狂犬病ウイルスは生息密度に主要なインパクトを与えたと考えられる。

注：分類はNowak（1999）「Walker's mammals of the world 6<sup>th</sup> edition」に従い、その他はミシガン大学動物学博物館「Animal Diversity Web」に依った。

[http://animaldiversity.ummz.umich.edu/site/accounts/information/Procyon\\_lotor.html](http://animaldiversity.ummz.umich.edu/site/accounts/information/Procyon_lotor.html)

## 2) アライグマ基礎資料

川道美枝子（関西野生生物研究所）

### アライグマオス、メスの見分け方

アライグマの性別は尿道の位置（下写真の白い矢印の部分）と外部生殖器の形態で区別できる。犬と同様にオスの尿道口は腹部のやや下方にあり、メスは肛門のすぐ手前である。子育て中のオトナメスは乳首が発達している。



アライグマオトナオス



アライグマオトナメス 乳首が発達している

### アライグマの体重

京都市、長岡京市、向日市で捕獲されたアライグマの体重分布を下図に示す。

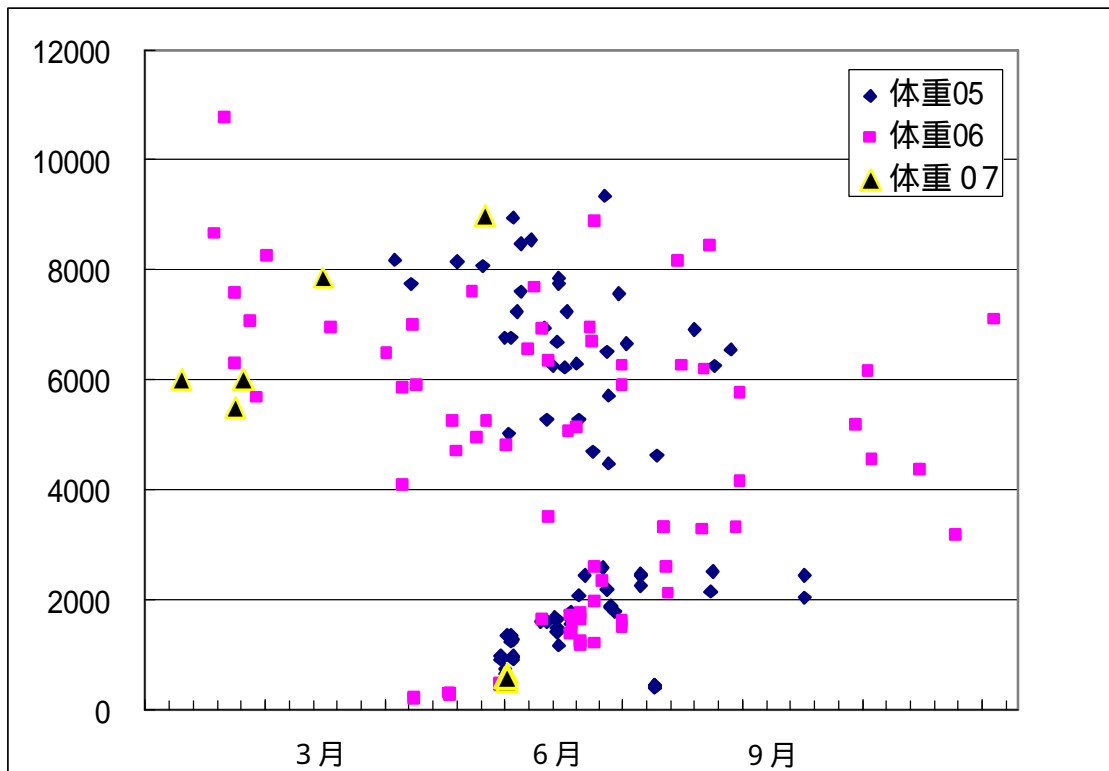


図 平成 17 年度年-平成 19 年度年に捕獲されたアライグマの体重分布図  
Y 軸は体重 ( g )、X 軸は捕獲された日を示す。子供は 3 月以降から出現する。

京都のオトナメスの平均体重は  $6,062\text{g} \pm 208\text{g}$  ( $n=45$ )、オトナオスの平均体重は  $7,407\text{g} \pm 258\text{g}$  ( $n=35$ )である。オス、メスの体重差は有意 ( $p<0.0001$ ) であり、オスはメスよりも重い。

子供の出生時体重は 60 から 75g 程度 (田辺鳥獣害対策協議会 2005) であるが、京都で捕獲された個体の最小体重は 180g (平成 18 年度年 4 月 23 日京都市京北) であった。子供が捕獲されるのは、母とともに巣外で活動しはじめてからが多いが、時には天井裏等の巣内で一腹の子供が総て捕獲されることがある。平成 17 年 8 月 1 日、京都市北区、農家の天井裏から捕獲された例では 4 頭 (総てオス) で体重は 400g から 448g であった。平成 18 年 5 月 8 日、京都市西京区の農家の天井裏から捕獲された例では 5 頭 (オス 2 頭、メス 3 頭) で体重は 260g から 300g であった。巣から子供を取り出すと、母親は数日間子供を捜して周辺を動き回る。子供を見つけた場合には、くわえて別な場所へ移動させた例がある。子供だけが罠に入った場合に、罠の外から母親が哺乳した例も報告されている。

出生後 7 週間から 9 週間後、巣外へ出る。巣外では母親と行動を共にするが、そのころには体重はほぼ 1 kg を超える。巣外では母子は一緒に行動し、川を渡る際、遅れた子供を母親が待ったり、迎えにゆくことも目撃されている。

出産は年 1 回と言われているが、子供を失った場合は再発情して出産する可能性があるため、子供が捕獲された地点では母親が捕獲されるまで罠をかけ続ける必要がある。

### 体の大きさ

アライグマの体のサイズは (頭胴長: 鼻先から尾の付け根までの長さ) 体重とかなり相関し、体サイズが大きくなるにつれ、体重も増加する。体重が 5 kg を超えると、体のサイズの増加は緩やかになる (下図)。体重約 11kg の個体でも頭胴長は 61cm である。

尾長は 30cm 程度である。尾の千切れた個体は少ない。

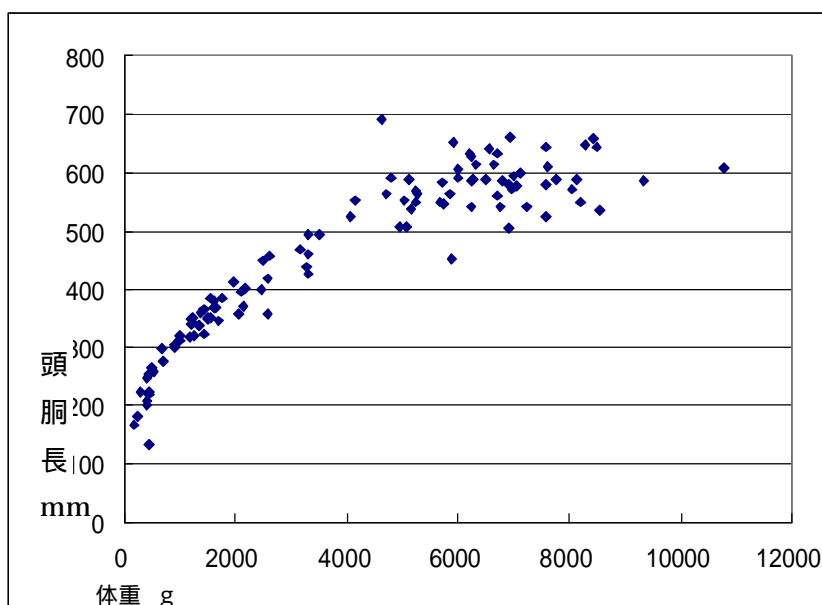


図 頭胴長と体重の関係